

24色のペン

ミシシッピに戻った107歳＝國枝すみれ（デジタル報道グループ）

國枝すみれ | オピニオン | 速報

毎日新聞 | 2023/12/17 06:00（最終更新 12/17 06:00） | 有料記事 1885文字



100年後、メイミー・カークランドさんは故郷のミシシッピに戻った＝ドキュメンタリー映画「ミシシッピから100年」のウェブサイトから

黒人のメイミー・カークランドさんが米国南部ミシシッピ州エリスビルから北に逃げたのは1915年、7歳の時だ。

夜、職場から帰宅した父親が言った。「今すぐここを出なくてはいけない。お前たちは朝一番で汽車に乗れ」

父と友人のジョン・ハートフィールドさんにリンチの危険が迫っていた。英語でリンチとは、集団暴行の意味ではない。超法規的になぶり殺しにすることだ。

一家は二度とミシシッピに戻らなかった。

だが、一緒に逃げたハートフィールドさんは4年後、父の反対を押し切って故郷に戻った。その彼を、町民は犬を使って追い回し、撃った。病院に担ぎ込んだのは「公開処刑」の時まで生かしておくためだ。



19年6月26日、田舎町はお祭り騒ぎだった。地元紙ミシシッピ・デイリーニュースが1面で報じたからだ。「ジョン・ハートフィールドが今日午後5時、エリスビルでリンチされる」

「ミシシッピから100年」を上映するために来日したタラブ・カーランド監督（中央）を囲むアメリカ史研究者ら＝東京千代田区の共立女子大学・短期大学で2023年12月2日、國枝すみれ撮影

黒人がリンチされるのを見物しようと、1万人以上の白人が集まった。

ハートフィールドさんは首縄をかけられ、木からつり下げられた。揺れる体に2000発以上の銃弾が撃ち込まれた。その一発が縄を撃ち抜き、体が地面に落ちると、火が付けられた。黒焦げになった体は切りきざまれ、見物人が土産物として一部を持ち帰った。

信じられないかもしれないが、すべて本当にあったことだ。

米国では南北戦争を経て1865年に奴隷制が廃止されたが、財産ではなくなった黒人に対するリンチが増えた。19世紀後半から20世紀にかけて約5000人がリンチで命を失ったとされ、その多くが南部の黒人だった。約600万人の黒人が南部から北部に逃げた。

「記事を見つけた瞬間、長くあたためていた映画のフォーカスが決まった」。メイミーさんの息子で、映画プロデューサーのタラブ・カーランドさん（74）が来日して、インタビューに応じてくれた。



母親メイミーさんの人生をたどるドキュメンタリー映画「ミシシッピから100年」について講演するタラブ・カーランド監督（左）と妻で日系アーティストのノブコ・ミヤモトさん＝東京千代田区の共立女子大学・短期大学の教室で2023年12月2日、國枝すみれ撮影

「母から何度も聞かされたハートフィールドの物語は、本当に起きたことだった。そして、100年もの間、トラウマを抱えながら生き残った。母が語る物語はもっと大きく重要な物語の一部なのだ、とはっきり理解した。母たちは人種暴力というテロが作った避難民だった」。ドキュメンタリー映画「ミシシッピから100年」が生まれた瞬間だった。

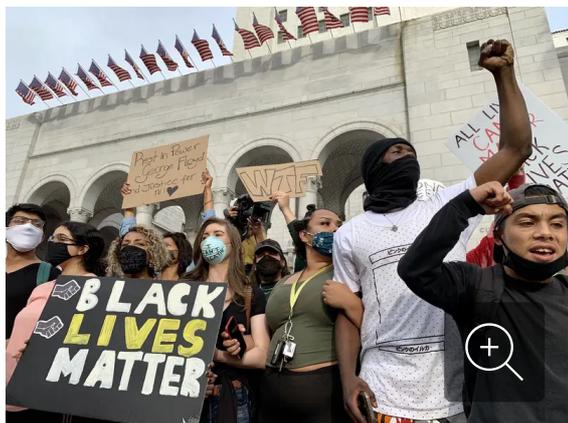
メイミー一家は移住先の中西部イリノイ州で人種暴動に巻き込まれる。白人が黒人地区を焼き払い、数百人を殺した。

「止まれ」と警告された黒人男性が立ち止まらずに射殺されるのを、メイミーさんは目撃する。その男性は耳が聞こえなかったのだ。次に逃げたオハイオ州でも、KKK（クー・クラックス・クラン）のメンバー3人が家の前で十字架を燃やした。一家はさらに北へ逃げ、最終的にはカナダに近いニューヨーク州に落ち着いた。

映画のハイライトはメイミーさんのミシシッピへの帰還だ。

「ミシシッピは頭の中から消したの」。そう言って抵抗していたメイミーさんだが、2015年9月に決意。息子と一緒に生まれ故郷に戻り、ハートフィールドさんがリンチされた場所で祈る。

107歳になっていた。



人種を超えて腕を組み、声を上げる黒人差別への抗議デモ参加者＝米西部カリフォルニア州ロサンゼルスで2020年6月2日午後5時52分、福永方人撮影

「もう怖くない」。映像に記録されたメイミーさんの表情は自信にあふれている。「100年前のことを伝えるのは大切だ。私はそこにいたから」

「母は人種暴力の目撃者で、その経験を証言した。人間は決してあのように扱われるべきではない、と公に宣言したのです」。111歳で亡くなった母親をトラブさんはそう振りかえる。

あれから時が過ぎ、黒人の地位は改善したが、平等とはほど遠い。そのうえ、自尊心を失う（白人の）子供がいるとして、学校で人種問題や公民権運動の歴史を教えることに制限をかける州が増えている。黒人のノーベル文学賞作家トニ・モリスンの「青い眼がほしい」などの本に「問題がある」とクレームをつけ、図書館に置かせないようにする動きも拡大している。

トラブさんは危機感を持っている。「我々が覚えていることを消そうとする危険な試みだ。それに抵抗しなくてはいけない」

日本にはそんなむごい差別はない、と思うかもしれないが、はたしてそうだろうか。

100年前の関東大震災後に朝鮮人や中国人が虐殺された事実を否定しようとする人がいる。特定の人種や民族をターゲットにした放火や暴力、「死ね」「日本から出ていけ」といった差別的な言葉を投げつけるヘイトスピーチもやまない。

彼らの言動は米国の白人至上主義者と大差ない、と思う。「ミシシッピ」は今もそこにある。

【デジタル報道グループ・國枝すみれ】

<※12月18日のコラムは北海道報道部写真グループの貝塚太一記者が執筆します>



武器を持たない黒人を警察が射殺する事件が繰り返される米国で、正義を求めて抗議する黒人女性＝ニューヨーク市で2016年7月、國枝すみれ撮影

毎日新聞のニュースサイトに掲載の記事・写真・図表など無断転載を禁止します。著作権は毎日新聞社またはその情報提供者に属します。

画像データは（株）フォーカスシステムズの電子透かし「acuagraphy」により著作権情報を確認できるようになっています。

Copyright THE MAINICHI NEWSPAPERS. All rights reserved.